酒を酌んで裴迪に与う（王維）

酒を　酌んで　君に　与う　君　自ら　寛うせよ
人情の　翻覆　波瀾に　似たり
白首の　相知　猶お　剣を　按じ
朱門の　先達　弾冠を　笑う
草色　全く　細雨を　経て　湿い
花枝　動かんと　欲して　春風　寒し
世事　浮雲　何ぞ　問うに　足らん
如かず　高臥して　且つ　餐を　加えん　には

酌酒與君君自寛　人情翻覆似波瀾
白首相知猶按劍　朱門先達笑彈冠
草色全經細雨濕　花枝欲動春風寒
世事浮雲何足問　不如高臥且加餐

解説　作者が親友の裴迪と酒を飲んだとき、裴迪が仕官出来ないことを不満に思っていたのを、慰めようとして作った詩。

語釈　※裴迪＝盛唐の詩人。王維の別荘に住んでいた。※君＝裴迪。※自寛＝ゆったりとした気持ちになる。※翻覆＝心や態度が変わる。※波瀾＝激しい変化や曲折のあること。※白首＝白髪になるまでの付き合い。※相知＝友人。※按剣＝刀の柄に手をかける。※朱門＝富貴の人の家の門を朱で塗ったことからいう。※先達＝先に官位についた人。※弾冠＝冠をはたいて埃を払う。仕官の準備をすること。※草色＝春に芽吹いた草々。※全経細雨＝細かな雨を一面に受けて。※湿＝湿っている。（つまらぬ人物が恩恵を受けて栄えること）※花枝欲動＝枝についた花のつぼみが開こうとする。※春風寒＝春風が冷たい。（ここも裴迪を含めて、立派な人物が才能を発揮出来ず不遇な境涯にいることに例える）※不如＝かなわない。及ばない。※高臥＝枕を高くして眠る。※加餐＝食事を取ること。体を大切にの意。

通釈　酒を君に勧めよう。一杯飲んで気を大きく持ってほしい。人の心が変わるのは、あの大波小波のようなものである。互いに白髪になるまで、付き合ってきた友達でさえ一旦何かあると、刀の柄に手をかけて睨み合う世の中だし、朱門に住んでいる先輩は、冠の埃をはたいて仕官の準備をしている人をあざ笑って力を貸そうともしない。若草は春雨の恵みを十分に受けて潤い、枝の花の蕾みは開こうとするが、春風が冷たいために、開けないでいる。と同じように、つまらぬ人物は恩恵を受けて羽振りがよいが、君子は志を得ず不遇である。世間のことは問題にする心要もない。それよりも、山に穏れ、枕を高くして暮らし、飯でも食べて体を大切にした方がよい。